

第 4 章 まとめ

加齢は種々の生理機能の低下をもたらす。呼吸機能もその例外ではなく、ほぼ直線的に著しく機能低下することが知られている。加えて呼吸器は外界からの空気を直接吸入することから、様々な影響を受ける可能性が高い。しかし、そのような状況にありながら人為的で付加的な影響要因である喫煙は多くの人の間で続けられている。

そこで、呼吸器に二重のリスクがある高齢者の喫煙に着目し、地域の高齢者を対象にその呼吸器症状及び呼吸機能と喫煙状況の関連について、質問紙調査と呼吸機能測定の二つの方法によってデータを収集し検討を加え以下のような知見を得た。

研究 I では呼吸器症状と喫煙状況の関連について 1,954 名から得られた回答を解析、検討した。

Current smokers では痰、喘鳴、急歩時の息切れなどで高いオッズ比を示した。また、喫煙する際に肺まで深く吸い込む者が「痰がでる」症状で高いオッズ比を示し、喫煙量の指標である B.I. で 901 以上の Heavy smokers 群では痰を中心に咳、喘鳴、急歩時の息切れなど多くの症状で高いオッズ比を示した。

喫煙習慣の有無、喫煙方法及び喫煙量が影響していることを示すものであり、喫煙は呼吸器症状にとって重大な要因であることが認められた。

研究 II では呼吸機能及び持久的運動能力と喫煙状況の関連について高齢で概ね健康な男性 120 名を対象に検討した。

B.I.をはじめ喫煙期間、1 日当たりの喫煙本数は $FEV_1\%$ とネガティブな関係にあったが、統計的な有意差は認められなかった。他の呼吸機能検査項目 (FVC , FEV_1 , $MMFR$, \dot{V}_{26}) と持久的運動能力の指標とした 6 分間歩行においては喫煙との関連は認められなかった。呼吸機能に影響を及ぼす要因は多いことが指摘されているが、喫煙以外の要因が大きく働くものと考えた。